

第3章 総論



4410342 岡城跡（竹田市竹田）

第1節 保存管理における今後の課題について

今回の調査事業と関連して、天然記念物（地質鉱物）における保存管理の課題について記述する。文化的な財産は、地域の大地の生成と変遷、その上に築きあげられた人々の生きざまの歴史の中で、遺されてきた。天然記念物のうちの地質鉱物の案件は「地域の大地の生成と変遷」と大きく関わり、その重要性を考察・評価することが要求される。

天然記念物のうちの地質鉱物の案件の保存管理に関わる課題は、現在の時点で指定される案件を「大地の生成と変遷」の中での現在の様相として記述して、その後の変遷の一断面としてとらえ、その価値を表現していくことが重要である。

今回の天然記念物緊急調査事業（地質鉱物）は、平成19年度から平成21年度にかけて実施された前回調査の調査物件リストの見直しと「平成28年（2016年）熊本地震」による大分県内の対象物件の被害状況の把握を主な目的として実施された。特に、「平成28年（2016年）熊本地震」にみられるような、大規模な大地の変動からは、地質鉱物の天然記念物としての重要性の変化が具現化され、価値の評価とともに保存管理に関する課題への対応を要請することとなった。例として、2016年熊本地震以後も竹田市における阿蘇火砕流関連の崖の崩壊、耶馬溪の一目八景の崖の崩壊、姫島の大海のコンボリュート崖の複数回の崩壊などが挙げられる。

さて天然記念物としての評価は、まず科学的価値の担保が第一義的に重要である。その価値評価を保存管理の観点で考察すると、学術的価値のモニタリングが挙げられる。対象案件の継続的な調査研究とその成果の確認と公開の継続が保存管理に関する重要なモチベーションとなると考える。

次に、特に崖や地層・岩石の場合は、安全性の確保に気を配ることが大事である。天然記念物としての価値には、大地の活動（断層活動や地震活動などの地殻変動、海面変動、気候変動など）の自然状態の変遷過程も考えると、侵食や崩落などの過程が含まれる。その際の崩壊などの規模などの想定をした上での安全性への対応が求められる。

また、「大地の生成と変遷」を考慮した長期的な保存管理の視点も重要である。学術的価値を評価する上で、地層や岩石がどのような変遷の中での一過程であるかを意識することになる。崖などの断面は、変遷の過程で学術的な価値の高い新鮮な様相を呈することも多い。このように対象案件が大地からはずれていく変遷過程で生じた地層や岩石等の保存を意識するとともに、変遷過程や状態を想定した対象案件の保存法の検討も合わせて考慮することも、保存管理に関わる重要な視点である。

さらに、天然記念物の保存管理のために、他の文化的分野との視点も重要である。天然記念物の保存管理は、天然記念物としての学術的価値評価の観点が重要であるとともに、文化財としての方向性を大事にすることが望まれる。そのために、名勝や文化的景観などと協働した地域での保存管理を検討することも有効であろう。

また、社会生活のための国土変化への活動とのすりあわせも非常に重要である。最近では、大規模な大地の変容をもたらす工事等が公共の利益（災害軽減やエネルギーシフト等）の要請で進められている。海岸線での大規模工事や山稜や分水界での大規模工事の実施にとまなう自然環境の保全と対応した天然記念物保全の課題も注目して、対応の検討が急がれる。

最後に、利活用への視点と保全への視点の融合が重要である。そのためには地域の大地や環境財産としての視点を大事にするジオパークやユネスコエコパークなどの活動との関係で、保全のありかたの模索も進めていくことは有効であると考えられる。

（竹村 恵二、桂 雄三）

第 2 節 災害による記念物の毀損について

自然災害と保存管理

近年、豪雨や地震などの自然現象による災害が県内において多発し、貴重な文化財が毀損した事例が発生している。天然自然の文化財である天然記念物は自然の作用を直接受けるが、自然のエネルギーは巨大で記念物に与える影響は極めて大きく、その対策を行うことは重要な課題である。また竹田の阿蘇火砕流堆積物（国指定天然記念物）や耶馬溪の一目八景（国指定名勝）など、直接の自然現象との因果関係は明瞭でないが、崖の突然崩壊により、地形・地質関連の記念物が毀損された例もみられる。

史跡や人工の文化財と異なる天然記念物が自然の作用を受け、侵食や崩壊による影響で変化するのは当然であり、その変化が「被害」であるか否か、人為的に「復旧」すべきか否かの議論が生じるところでもある。特に、地質鉱物については、変化する自然環境や自然災害の影響による対象案件の変化も一過程であると考えて対応することが必要である。

天然記念物はその土地の自然から生み出された地質的所産であり、地域の象徴でもある。大きな自然現象による毀損を受けた場合には、状況をきちんと記録し後世に残すとともに、その後の経過を継続的に観察していくことが求められる。

また、こうした文化財を後世に残し伝えていくため、地域の文化財について人々が知り、その価値を発見・共有することにより、持続可能な継承が図られることが重要である。

近年発生した主な自然災害等で毀損した文化財

発生日月	災害名称	内容
2012年7月11日～14日	平成24年7月九州北部豪雨	線状降水帯の発生による福岡県・熊本県・大分県を中心とする集中豪雨
毀損した文化財 ①被害件数：総数 17 件（国指定・選定，県指定：10 件） ②毀損文化財： 《国指定》史跡 ガランドヤ古墳（日田市），岡城跡（竹田市） 他 1 件 名勝 耶馬溪（中津市），名勝 旧久留島氏庭園（玖珠町） 《国選定》重要伝統的建造物群 豆田町重要伝統的建造物群保存地区（日田市） 重要文化的景観 小鹿田焼の里（日田市） 《県指定》有形 筏場目鏡橋（日田市），クリシタン洞窟礼拝堂（竹田市） 他 2 件 無形民俗 鶴飼 史跡 青の洞門（中津市），石坂石畳道（日田市） 他 2 件 天然記念物 山蔵のイチイガシ（宇佐市）		
2016年4月16日	平成28年熊本地震	別府市と由布市で震度6弱、その他の市町村で震度4以上を観測
毀損した文化財 ①被災件数：総数 37 件（国指定・選定：12 件，県指定：17 件，国登録：8 件） ②毀損文化財： 《国指定》重文 旧日野医院（由布市） 史跡 岡城跡（竹田市），廣瀬淡窓旧宅及び墓（日田市）他 5 件 名勝 耶馬溪（中津市），名勝 旧久留島氏庭園（玖珠町） 天然記念物 大岩扇山（玖珠町） 《国選定》重要文化的景観 別府の湯けむり・温泉地景観（別府市） 《県指定》有形 石造五輪塔（豊後大野市）他 8 件 史跡 竈戸氏墓地古塔群（別府市），永山城跡（日田市）他 6 件 《国登録》登録有形 帆足家本家住宅（大分市），小手川酒造（臼杵市）他 6 件		

2016年6月30日	—	崖崩れ
毀損した文化財 《国指定》名勝 耶馬溪（中津市）		
2016年9月30日	—	岩壁の崩落
毀損した文化財 《国指定》天然記念物 竹田の阿蘇火砕流堆積物（竹田市）		
2017年7月5日～6日	平成29年7月 九州北部豪雨	線状降水帯の発生による福岡県と大分県を中心とする集中豪雨
毀損した文化財 ①被災件数：総数17件（国指定・選定：11件，県指定：2件，国登録：4件） ②毀損文化財： 《国指定》重文 草野家住宅（日田市），旧矢羽田家住宅（日田市）他2件 史跡 ガランドヤ古墳（日田市），廣瀬淡窓旧宅及び墓（日田市） 名勝 耶馬溪（中津市） 天然記念物 耶馬溪猿飛の甌穴群（中津市）他1件 《国選定》重要伝統的建造物群 豆田町重要伝統的建造物群保存地区（日田市） 重要文化的景観 小鹿田焼の里（日田市） 《県指定》史跡 青の洞門（中津市），石坂石畳道（日田市） 《国登録》登録有形 井上家住宅（日田市），山田家住宅（日田市）他2件		
2020年7月3日～31日	令和2年7月豪雨	7月3日以降に熊本県を中心に九州や中部地方など日本各地で発生した集中豪雨
毀損した文化財 ①被災件数：総数9件（国指定・選定：5件，県指定：4件） ②毀損文化財： 《国指定》重要無形 小鹿田焼（日田市） 史跡 岡城跡（竹田市），宇佐神宮境内（宇佐市） 名勝 耶馬溪（玖珠町） 《国選定》重要伝統的建造物群 豆田町重要伝統的建造物群保存地区（日田市） 《県指定》有形 筏場目鏡橋（日田市），オダニの車橋（由布岳） 史跡 永山城跡（日田市） 天然記念物 長崎鼻の海蝕洞穴（豊後高田市）		

情報提供：大分県教育庁文化課

第 3 節 増補改訂版の作成にあたって

増補改訂版の先にあるもの

今回の天然記念物緊急調査事業（地質鉱物）は、平成 19 年度から平成 21 年度にかけて実施された前回調査の調査物件リストの見直しと「平成 28 年（2016 年）熊本地震」による大分県内の対象物件の被害状況の把握を主な目的として実施された。総調査件数は、前回の 284 件に今回の調査物件 71 件を加え、355 件となった。

この間の文化財行政の方向性の大きな変化として、従来ともすれば文化財のカテゴリーごとに扱われてきた文化財の総合的把握の視点が再確認されたことがある。さらに平成 25 年には、大分県内の 2 か所のジオパークが認定され、地学への関心を高めるツールができたことがあげられる。

大分県個別の課題としては、火山関係の物件が充実しているのに比べ、その基盤をなしている、より古い時代の地層についての物件の扱いが少ない。ことに、大分県南部の中生代の地層群にいたっては、鍾乳洞を除くと極めて少ない状況にある。

今後の対象物件を捉える視点として学術的な重要性の担保に加えて、①暮らしや生業といった生活文化に密着した説明の充実、②災害の痕跡や防災からの視点、③気象・海象に関わる物件の充実が望まれる。

今回の成果が、文化財指定といった形での保存活用に結びつくことも重要ではあるが、地学的な視点から、地域というものを考える際の基礎であるということ、様々な媒体を用い様々な機会を捉えて、市民に伝える素材として機能することがなにも増して大切である。

この事業が当初目指した趣旨を再確認し、今後の事業の展開を考えるために、平成 11 年 10 月の月刊文化財の記事『天然記念物緊急調査事業（地質鉱物）』を以下に再掲しておきたい。

天然記念物緊急調査事業（地質鉱物）

天然記念物は、動物、植物、地質鉱物、天然保護区域の 4 つのカテゴリーからなる。天然記念物のカテゴリーのうち動物と植物関係の物件については、昭和 42-47 年度にかけて都道府県単位での全国調査が行われ、天然記念物緊急調査「植生図・主要動植物地図」として報告書が作成されている。全国レベルでの物件の把握ができていたのである。ところが、地質鉱物関係の物件の全国的な分布は分かっていなかった。

地質学の分野は 1970-80 年代にかけて、かつてない大きな変革を経験した。プレートテクトニクス理論の台頭と普及である。地震や火山活動などの現在の現象をはじめ、様々な地学現象がプレート運動による現象としての再解釈を迫られた。わが国の成り立ちを示す過去数億年にわたる地学現象の抜本的な見直しが行われたのである。

天然記念物緊急調査事業（地質鉱物）

こうした見直しの一応の終息を受け、文化庁では平成 5 年度より、既存事業を拡充し、都道府県を事業主体とした地質鉱物関係の重要な物件の洗い出しを目的として、天然記念物緊急調査事業を開始した。平成 11 年度現在での、事業の進捗状況と成果を表に示した。本号では、このうち秋田県、千葉県、山口県での事業の成果について紹介していただいている。各県の地質地形に精通した第一線の研究者による調査成果は、学術的にも最先端の内容が多く含まれている。

調査項目の選定に際しては、既存指定物件のカテゴリーや最終的に天然記念物に指定され保護される際の困難さは意識せず、純粹にわが国（ないしは地域）の成り立ちを知る上で重要な物件をリストアップしてい

ただくようお願いした。

調査内容は多岐にわたっている。各種岩石産地、様々な時代の化石産地・貴重な標本、各種浸食堆積現象（海、川、湖沼、風によるもの）、気象現象、火山温泉現象、断層褶曲活動等々。およそ生き物以外の自然現象全てをカバーする広範な内容となっている。対象のスケールをみても、山脈、海域や河川の集水域といった広大なものから、民家の裏の小さな崖、果ては数センチメートルの化石標本まで様々である。

こうした成果は、ただ単に天然記念物指定のための母集団となるばかりではない。地域を理解するための新たな切り口を提供するものでもある。学校教育や社会教育のための素材や文化財を視野に入れた地域活性化のサテライトともなるものである。さらには、開発事業立案の際の基礎資料としても役立つかもしれない。

地質鉱物関係の天然記念物は保存のし易さといった視点からは、比較的容易なものが多い。事実、溶岩や古い時代の堆積岩の地層などは、多くの場合雨ざらしでも保存要件が決定的に損なわれることはない。しかし、浸食や風化作用は確実に進行してゆく。一方全く同じでないにしろ、動物や植物の天然記念物は子孫を残すことができる。保護増殖を行うことにより、複製をつくる可能性がある。しかし、地質鉱物関係の天然記念物は違う。現在観察される地表面は現在のもので、一時として同じ状況はない。失われた2億年前の岩石や化石と同じものは二度と再び地球上に現れることはない。こうした記憶は永久にしかも完全に消去されるのだ。

地質鉱物関係の物件も天然記念物

我々の暮らす日本は、太平洋の西岸の中緯度に位置する。北から千島、本州、伊豆小笠原、琉球の4つの弧状列島の集合体である。各弧状列島とユーラシア大陸の間には、オホーツク海、日本海、フィリピン海、東シナ海の4つの縁海が発達する。各弧状列島の下へは厚さ数十キロメートルにも及ぶ太平洋、フィリピンの両プレートが沈み込みを続け、激しい火山活動や地震活動などの地殻変動が引き起こしている。

わが国の自然環境は多彩である。流氷が押し寄せるオホーツクの海からサンゴ礁に縁取られた南西諸島、脊梁山脈により二分される太平洋側と日本海側。東アジアモンスーンの影響を受けた温暖で湿潤な気候。そこで繰り広げられる鮮やかな季節の変化。

我々が生活する地表は、数億年に及ぶ地史を経てつくられた様々な岩石からできている。岩石は風化し特有な土壌を形成する。土壌には特有な植生が形成され、それを利用する動物が生息する。こうした関係は現在もそして将来も続く。我々日本人は、このシステムから無縁ではない。こうしたシステムに依存した様々な有機的・無機的資源を能動的にあるいは受動的に利用してきた。

我々の祖先たちは、あるときは数億年前に熱帯海域でつくられたサンゴ礁の石灰岩の山に分け入り、またあるときは地下数十キロメートルの深さから上昇してきた蛇紋岩の山に咲く花を愛でてきた。ある時は激しい火山噴火により以前の生活の場が一瞬にして失われることもあった、だが、一方で噴火に伴う火砕流や降灰により平坦化された大地は新たな生活の場を提供した。

我々日本人は、こうした自然の中で多様な文化を展開してきた。天然記念物は、文化を形成した培地である。その中でも地質鉱物関係の天然記念物は、その一番基礎をなすカテゴリーである。大地の天然記念物である地質鉱物関係の物件の保護と、境目のない自然－文化観に基づく文化財保護思想の更なる醸成を期待したい。

(桂 雄三)